

TPDS NEWS



※ TPDS = Tokyo Plastic Dental Society = (一社) 東京形成歯科研究会

Vol.71

配信日：2024年4月19日

配信元：(一社) 東京形成歯科研究会 事務局

信州歯報 記事紹介

“妖怪を訪ねて三千里”

相談役・理事 北村 豊 先生

当会の相談役・理事 北村豊先生からご提供いただいた記事をご紹介します。

記事の内容につきましては、別紙※(Emailの場合:別添)(Faxの場合:本状含め2枚目)の通りでございます。

※ 別紙 出展元: 信州歯報 2020年(令和2年)1月 発行

事務局より

会員の先生方から情報提供いただければ、その都度、施設長に相談して、「TPDS NEWS」にて配信させていただきます(施設長より)。従来は、歯科・医科に関する内容を配信しておりましたが、北村先生のご指導もあり、「TPDS NEWS」を会員・関係各位の交流の場(ツール)として活用していただくことを目的に、配信する内容(企画)の幅を拡大することと致しました。お気軽に「TPDS NEWS」の材料(ネタ)を事務局まで(下記)ご提供いただけると幸いです。ご検討の程、何卒宜しく願い申し上げます。※反社会的内容等の場合は、配信を断念する場合もございます。予めご了承願います。

〒114-0002 東京都北区王子 2-26-2 ウェルネスオクデラビルズ 3F

一般社団法人東京形成歯科研究会 事務局

Email: okudera@carrot.ocn.ne.jp

TEL:03-3919-5111/FAX:03-3919-5114

36・48・60・72・84・96子

にゅういやあエッセイ

□ 妖怪を訪ねて三千里

須高 北村 豊 (72歳)

思いもかけぬ水木しげるさんとマレー半島のジャングルに約1週間の旅に行ったのは、平成6年(1994年)の2月末であった。

この旅のきっかけは、マレー半島先住民の“夢の文化”を調査していたノンフィクション作家の大泉実成さんを、私がかつて青年海外協力隊員として3年間を過ごした地域のジャングルに、すでに二度も案内していたからであった。

大泉さんから、「ジャングルは精霊の宝庫である！」ことを告げられた水木しげるさんの“ここ”に火が点いてしまったのであり、もちろん放火の「確信犯」は大泉被告であって、私は幫助罪にもあたらないと信じているが…。

同行とは言っても、ラバウル戦を経験した水木さんを除いては、何となくコンクリートジャングル慣れた3人を気温33度前後、湿度90%近い熱帯で私の知り合いの先住民を頼って宿を確保し、朝から夜まで案内やマレー語の通訳をするのは私にとっても大仕事であった。

私はTシャツ、短パン、ビーチサンダルの軽装なのに皆さんは、登山グッズに長ズボン、という出で立ちなのは、失礼ながらつい笑いが込み上げてきたほどであった。

私は、テレビ番組製作でもジャングルにスタッフを案内したこともあるが、「日本人という人種」が、不慣れたジャングルなどの環境でどんな行動や発言をしたり、どのように感じるのかを知るのは、私にとっては非常に興味深く、その人の思考回路や異文化に対する日本人?の適応性も見えてきて、とても面白い。

水木しげるさんととの珍道中については、さすがノンフィクションライターである大泉さんが詳細に厚いノートにメモっていて、帰国後に2冊の本が出版された。大泉さんは、講談社のノンフィクション賞を受賞し、亡き有名なジャーナリストの筑紫哲也さんにもその能力を絶賛されたほどの実力者であり、マレーシアから帰国後に出版された本も絶妙な筆致力には惹きつけられたが、恥ずかしながら私の行動、言動が秀逸な“大泉偏光グラス”を通すと、このような記述になるのだ!と感心したり、恥じたりしたことを思い出す。

ここで「水木しげるの妖怪探検—マレーシア大冒険」(講談社文庫・1999年)より少し転載させていただきます。

そして、今回も通訳にコーディネーターにと大活躍だった北村先生を水木さんは賞讃し、

「北村先生はマレーの宝です」とまで言う。

「北村先生みたいな人は、初めてです。なにか、底なしの井戸みたいな(と言って長い間、皆思い当たる場所があって笑い転げる)普通のつるべじゃ汲み切れないです。

動きも特別です。精霊のような動きです。

先生は、ナニカ本格的なアルモノ、ですよ。『狂』の字がついとるわけです。現代の熊楠かもしれません。怪物は怪物を知る、というところか。

午後二時二五分雨やまず。

川を越えた急斜面の崖の上に、バンブーハウスが一軒ボツンとあるのだが、水木さんと北村先生はそこに行っているという。水木さんはどうやってあの崖を登ったのだろうか。ありやしんどかろう。

午後三時五十分。水木さん帰ってくる。

大泉「先生、どうやってあの崖を登ったんですか?」
水木「あそこには絶壁があったですよ。もうダメかと思いました」

北村「僕がちょっとお尻を押ししたり、引っぱったりして、なんとか」

水木「思い返すとエラかったです。もしスベったら『死』でしたよ」

大泉「でも良かったじゃないですか。水木先生は『断崖絶壁じゃないと冒険じゃない』とおっしゃってたんだから。これで十分堪能なすつたでしょう」

水木「ああ。言わなきゃよかった、そんなこと」

ストーカー?から逃れられた私と水木しげるさんは崖上の家で出会った巨大なタケネズミの子供に出会うことができ、幸福度は最高潮に達したのであった。

今年の干支でもあるネズミの子供を抱きかかえた水木さんの笑顔は、まさに孫をいとおしく思う好々爺そのもので、この時の旅行中で見せた最高の笑顔であった。

人生の旅は広ければ広いほど面白い!そのためにもそろそろ各種の会からの卒業も考えなくては……。

